

「旧約の信仰者たちの手本」の「荒野の旅」(11:23～31)

■ヘブル人への手紙の構成

二つの主要な区分	内容	箇所	警告
第一区分： 神学的理論を中心に (適用としての警告 も含む) ユダヤ教の三本柱と 御子との比較	テーマ	1:1～3	
	天使たちに優る御子	1:4～2:18	警告① 2:1～4
	モーセに優る御子	3:1～6	
	第二の警告 アロンに優る御子 (レビ族アロンの家系の祭司 職に優る御子) 注①	3:7～4:13 4:14～10:18	警告② 警告③ 5:11～6:20
第二区分： 適用(御子の優位性を 理解した上での、信者 の歩み)	勧めのための2つの基盤と4 つの勧め、警告、励まし	10:19～39	警告④ 10:26～31
	旧約の信仰者たちの生き方を 手本とする	11:1～40	
	信仰を持ち続けることの勧め	12:1～29	警告⑤ 12:25～29
	まとめとしての勧め	13:1～25	

注① レビ族アロンの家系の祭司職 ⇒ 以下、「レビ系祭司職」

■「旧約の信仰者たちを手本とする」11章の構成

細目	内容	箇所	
信仰の忍耐	信仰の特徴	1 節	
	このような生き方が可能であることを実証した人々がいる	2	
	目に見えないものを確信する事例＝天地創造	3	
族長時代以前	アベル	4	
	エノク	5～6	
	ノア	7	
族長たち	アブラハム	8～19	
	イサク	20	
	ヤコブ	21	
	ヨセフ	22	
旧約の信仰者たち (時系列で)	荒野の旅	モーセの両親	23
		モーセ	24～28
		イスラエル民族の人々	29～30
		ラハブ	31
試練の中で	イスラエル国史に見る信仰（士師たち・王たち・預言者たち）	32～34	
	信仰は死を乗り越える	35～38	
信仰の勝利		39～40	

■ 前回までの内容と今回のアウトライン

1. この手紙が書かれた背景と手紙の内容

- (1) ローマ帝国からの独立の機運が高まる中、愛国主義的な同胞から、ユダヤ人信者たちは迫害を受けていた。エルサレムの神殿に近いユダヤ地方の教会の中では、この迫害が収まるまで、いったん、ユダヤ教の祭儀に戻ろうという動きが出はじめていた。
- (2) この動きに対して、著者は警告を発するためにこの手紙を書いた。そのようなことをしたら、メシアを拒否したユダヤ人の民族的罪の中に逆戻りすることになり、来るべき神の裁き（紀元 70 年、エルサレム崩壊）に巻き込まれる。この手紙の中には、全部で 5 つの警告が語られている。
- (3) この警告は、物理的肉体的な命を失うという意味であって、霊的な救いを失うことではない。信者は、いったん救われたら、たとえ信仰を捨てたような生活に戻ったとしても、永遠のいのちを失うことはない。
- (4) 手紙の著者は、前半で、メシアがどれほど優れたお方であるか、ユダヤ教の三本柱「天使」「モーセ」「アロンの祭司職」と比較する。そして、後半では、前半で学んだことを信仰生活に適用して、具体的な勧めをする。
- (5) 手紙の読者は、迫害を受ける中で背教を考えている信者たちである。今彼らに必要なのは、信仰による忍耐である。そこで、著者は、信仰による忍耐を発揮した旧約聖書の信仰者たちの手本を語る。ここでは、手本となるひとりひとりについて短く簡潔に要点だけが、きびきびと書かれている。これはもちろん、読者に旧約聖書の知識があることを前提にしているわけであるが、同時に、この手紙が背教の間際にある信者たちに宛てた緊急のものであるという空気が伝わってくる。

2. 今回のアウトライン

- (1) ヘブル人への手紙 11 章は、信仰による忍耐を発揮した旧約聖書の信仰者たちについて、時系列で語っている。
- (2) 前回までに「族長時代以前」アベル、エノク、ノアの 3 人、「族長時代」アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフの 4 人、計 7 人を扱った。
- (3) 今回は、「荒野の旅」、荒野の 40 年の時代である。この時代を代表する人物はモーセであるが、ヘブル人への手紙の著者は、荒野の旅の開始からさかのぼること 80 年、モーセ誕生のとき、モーセの両親の信仰から紹介する。モーセの父はアムラム、母はヨケベテ（出 6:20）、彼らはエジプト王によるイスラエル民族迫害の中で命の危険を冒してモーセを隠した。ここには、迫害の中でいのちの危険を感じていた読者たちと重なる部分がある。
- (4) 今回の「信仰の手本」の特徴は、信仰による勇気と決断である。
- (5) アウトライン
 - ① モーセの両親（ヘブル 11 章 23 節）
 - ② モーセ（24～28 節）
 - ③ イスラエルの民（29～30 節）
 - ④ ラハブ（31 節）

1. モーセの両親 (23 節)

- (1) アブラハムからモーセ誕生までの経緯 (使 7:2～20)
- (2) モーセが生まれたころは、エジプト王によるイスラエル民族迫害が激しく、男子の赤子は殺すように命令されていた (出 1:1～22)。
- (3) モーセの両親は、モーセが生まれてから3ヶ月間、その子を隠した (出 2:1～2)。
- (4) 「彼らは、その子の美しいのを見たからです」 (23 節)
 - ① 美しい^ギアステイオス、新約聖書では、ここと使 7:20 だけ。ともにモーセ。
 - ② 外見的な美しさだけでなく、その子に神の使命があることを示唆する。「神の目にかなった」 (使 7:20)
- (5) モーセの両親は、神の啓示に応答して、その子を三ヶ月間、隠した。神の啓示に応答したという点で、彼らの行動は「信仰によって」である、
- (6) 「彼らは王の命令をも恐れませんでした」 (23 節)。彼らの勇気は、信仰によるものである。

2. モーセ 個人的な信仰 (24～26 節)

- (1) モーセの生い立ち 40 歳まで (使徒 7:21～23)
- (2) ヘブル 11:24～25 節 モーセは、「パロの娘の子」と呼ばれるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取った。
 - ① 信仰は、「パロの娘の子」として受ける待遇を「はかない罪の楽しみ」と考える。^ギプロスカリオス「束の間の、その時限りの、その季節の、一時的な」
 - ② 信仰は、エジプトにつながれ、泥だらけの奴隷の民を、「神の民」と受け取る。
 - ③ 信仰は、「楽しみ」よりも、「苦しみ」を選び取る。
- (3) 26 節 モーセは、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思った。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかった。
 - ① 「キリストのゆえに受けるそしり」 次の三つの解釈
 - 「油注がれた者のゆえのそしり」・・・モーセ自身が「油注がれた者」である。モーセは、エジプトからの解放という使命に自分が召されているという自覚をもっていた (使 7:25)
 - 「キリストのゆえに受けるそしり」・・・モーセは、キリストの型である。モーセが受けたそしりは、後にメシアが受けるそしりと同じようなものである (詩 69:9b)
 - 「油注がれた者のそしり」・・・ここでの「油注がれた者」とは、油注がれた民族であるイスラエル民族を指す (詩 89:50～51)
 - ② 「～にまさる大きな富と思った」^ギヘゲオウマイ＝指導する、命令する (公的な権威をもって) →考える、評価する、計算する
 - ③ 「報いとして与えられるものから目を離さなかった」・・・報いとして与えられるものの価値を正当にわきまえて、エジプトの宝、すなわち当時の世界をリードしていた超大国の宮廷での地位と富にも目を向けることがなかった。

3. モーセ 神の使命を行う者としての信仰 (27～28 節)

- (1) モーセの人生 40 歳から 80 歳 出エジプトまで (使 7:24～40)
- (2) 27 節 モーセは、王の怒りを恐れないで、エジプトを立ち去った。目に見えない方を見るようにして、忍び通したからである。
 - ① 映画「十戒」などの影響かもしれないが、モーセは王に殺されることを恐れて

エジプトから逃亡したかのように誤解されている向きがある。しかし、出2:14~15を読むと、モーセが恐れたのは、イスラエルの民に拒絶されたことである。

② 原文をできる限り語順のとおりに訳すと、次のとおり。

- 彼は言った。「だれが、おまえを俺たちのつかさやさばきつかさにしたのか？ 俺も殺そうと言うのか、あのエジプト人を殺したように！」
- 恐れた、モーセは
- 言った、「きっと知られた、あのことが」
- 聞いた、パロは、このことを
- 探した、殺そうと、モーセを
- 逃げた、モーセは、パロの前から
- 住んだ、地に、ミデヤンの

③ 「目に見えない方を見るようにして、忍び通す」・・・ギカルテレオウ「強くある、断固とした態度をとる、忠実である、耐える」。信仰によって「断固として立つ」。神の働きに用いられるのは、その次。

(3) 28節 モーセは、初子を滅ぼす者がイスラエルの民に触れることのないように、過越しと血の注ぎを行った。

① 「過越し」とは、滅ぼす者(出12:23 ヘシャカ「破壊」→ 破壊という呼称を持つ天使)がイスラエルの民に触れずに通り過ぎていくこと

- 参考：悪霊にも、「破壊」と呼ばれる者がいる(詩91:6、黙9:11)

② モーセが「過越しと血の注ぎを行った」というのは、イスラエルの民に命じて、家族ごとに、第10日に過越しの羊を群れの中から取り出し、数日間置いて傷のないことを確認し、その月の14日の夕暮れにこれを屠り(ほふり)、その血を自分の家の入口に塗らせたこと。モーセ自らも確信をもってそのように実行したこと。信仰ある者は、神のことばの細部に至るまで忠実に従う。

4. イスラエルの人々の信仰 (29~30節)

(1) 信仰によって、紅海を渡った。かわいた陸地を行くかのように。エジプト人も同じようにしようとしたが、のみこまれてしまった。

① 出14:5~30

② 荒野の旅40年での、最初の信仰の行い

(2) 信仰によって、七日間エリコの城壁の周囲を回った。すると、その城壁はくずれ落ちた。

① 民33:38 40年目の第5月の1日 ホル山 アロンの死(123歳)

② 民33:50 モアブの草原 ヨルダン川のほとり、対岸にはエリコ

③ 申1:3 40年目の第11月の1日

④ 申34:1~7 モーセの死(120歳)

⑤ ヨシュ4:19 第1月の10日 ヨルダン川を渡る

⑥ ヨシュ5:10 第1月の14日の夕方、過越のいけにえをささげる

⑦ ヨシュ5:11~6:25 エリコ攻城戦

5. ラハブの信仰 (31節)・・・ヨルダン川を渡る前の出来事(ヨシュ2:1~24)

神を認める(11節)→将来を見定め、決断する(12~13節)→機会を得て勇気をもって実行(6, 15, 21節)→不従順な人たちといっしょに滅びることを免れた。